「地球に生きる一人として自ら問いをもち、課題を我が事として探究していく子どもの育成」

指定校２年次　学校法人いいづな学園グリーン・ヒルズ小学校　青木　佑馬

（１） 本年度の NIE 活動の概要

本年度は、昨年度と同テーマ「地球に生きる一人として自ら問いをもち、課題を我が事として探究していく子どもの育成」から２年次目の目標「新聞の活用を通して、自分の世界をひろげる姿をめざして」として、「新聞の良さを見直し活用する」「多様なものの見方や考え方を広げる」ことを目標とした。

活動内容として「新聞コーナーの設置と注目記事の掲示」「職員による“職員 NIE”の掲示」「新聞を活用した体育、図工、探究、国語、家庭科の授業」を行った。

成果としては、新聞が情報源や素材として職員にとって昨年より身近になり、また、子どもたちにとっても同様な姿が見られた。例えば、昨年度 NIE に積極的に取り組んだ本年度の複式クラスの５・６年生は、家庭科の学習で「衣生活」についての現状を「新聞」から探し、「衣服は日本に影響を及ぼすか」というテーマを設定し、探究することができた。このように、自分の知りたい課題がある場合には新聞が情報源や素材の一つとなるようになってきた。教師からの新聞提示以外にも、学習などの場面において、子どもたちが自ら選択肢の一つに新聞をとりあげるようになった。

しかし一方で、新聞購読をしている家庭が少ない現状は変わらず、日常的に新聞に触れ、自分の世界が広がっていく環境を整えることの難しさがある。だからこそ、教育現場において、新聞を仲介役として、子どもたちと本物をつなげていく学習の重要性を感じる。今後も継続していきたい。

（２） 本年度の NIE をはじめる前の状況

本校は複式学級により小学校は３学級、全校２６名、中学校も複式学級で１学級１１名である。昨年度に引き続き、新聞購読が可能な場所を玄関近くに設定し、さらに新聞購読の習慣がない児童・職員が少なくない中、新たに職員自身が新聞の価値に気付き、教材化の視点をもてるように「職員による“職員 NIE”の掲示」を行った。

研究対象の小５・６年生学級は、家庭で新聞を購読し、自分でも日常的に読んでいる児童が８名中２名であった。児童の多くはテレビやネットに依存し、批判的視点が不足していた。

（３） NIE 活動の狙い（育てたい力）

本校では、子どもたちが「ほんものに触れる」ことをカリキュラムに組み入れることを重視している。しかし、調べる活動において、教師や子どもたちは、身近であり即効性のあるインターネット利用から脱却するのは難しい状況にある。インターネットを活用することは良いことである反面、人から直接聞く、学ぶ、実際に体験するという五感を通して学ぶ経験が乏しい傾向がみられる。そこで私たちは、新聞が「ほんもの」につながる題材の宝庫であることに焦点を当て、子どもたちと「ほんもの」をつなぐ仲介役としての活用を考えた。新聞記事で取り上げられた出来事や人物の存在を知り、そこに記述されている内容をしっかり読み取り、取材対象にアプローチすることができれば、新聞記者が書いた記事を第三者として読むことから一歩進み、自分が記事の対象に近付くことで「ほんもの」に触れ、実感として記事に留まらない発見、感動をもつことができる。それが記事の事実を「我が事化」する入口に立つことだと私たちは考えた。

子どもたちは、ネット上の情報を参考にすることが少なくないが、ファクトチェックの視点からも、新聞社という社会的信用や情報の信頼性と公平性が、「仲介役」として最適な存在であると考えた。

（４）公開授業以外の NIE の取り組みの状況

①教職員の NIE に向けた意識付け

新聞購読の習慣がない職員が少なくない中、職員自身が新聞の価値に気付き、教材化の視点をもつことを目的として、「職員 NIE」の展示を始めた。

数種類の新聞を職員が分担して週末に家に持ち帰り、子どもたちに知らせたい「押し記事」を１つ、新聞コーナーの一角に掲示するという試みである。「なぜだろう」「おもしろそう」などのそれぞれの視点から記事を取り上げ、教師個人の見解が垣間見えるユニークな展示となった。

「職員 NIE」の掲示物

②各学年の実践

○１・２年クラス

体育：「走の運動遊び」「多様な動きをつくる運動遊び」全６時間

〈単元名〉新聞忍者修行＊素材としての新聞に親しむことを目的とした活動

・体の前に新聞を貼り付けて落とさずに走る・新聞玉入れ・長い新聞しっぽを地面につけずに早く走る・新聞ボールリレー・新聞島から落ちずにゴールする

図工：「表現領域：造形あそび」

〈単元名〉「新聞がいろんな形に大変身」

・小さい新聞で出来上がる世界を創造し楽しむ

○３・４年クラス

探究：「消費と生産の循環が生活を支え豊かにする」

・校外学習で学んできたことをひとりずつ、新聞にまとめる

パラリンピックに関連する記事

○５・６年クラス

国語：〈単元名〉「主張と事例」

・新聞記事を元に「主張と事例」とは何かを学習

家庭科：「衣生活」

〈単元名〉「衣服は世界に影響をあたえる」

・新聞記事を活用した調べ学習を実施

（５）公開授業などの活動内容

○学年：５・６年生

○教科：探究

○単元名：「当たり前ってなんだ！？」（全 33 時間）

時数	主な発問(展開)	○学習活動/「生徒の反応」　評価規準	・留意点/○学習資料
1-3	・視覚が使えないとどうなるかな？ ・聴覚が使えない人はどんな困り事があるのかな？ 10/8	○目隠しをして、ペアで校舎の中を歩く。 ・「目の前が見えないと、いつも通っている場所でもわからなくなるな」 「音を頼りにするのかな」 ○映画「架け橋～聞こえなかった 3.11」を視聴する。 ・「こんな人たちがいるなんて知らなかった」	○アイマスク ○DVD「架け橋～聞こえなかった 3.11」 ・校舎内でぶつかったり転んだりしないよう、ペアの安全管理を促す。
4-6	・視覚が使えないとどうなるかな？他の五感を働かせてみよう。 10/15	○目隠しをして、ソロでロープを頼りに屋外を歩く。通称「暗夜行路」。 ○「トラストフォール」や「軌道修正」などお互いの信頼関係を構築するためのワークを行う。 ・「外でやると、また感じが違うな」 ・「なかなか勇気が出ないな」	○アイマスク ○ロープ
7	・その人が置かれている状況はいったい何だろう？ ・パラリンピックって知っている？ 10/16	○「エスカレーターに止まって乗りたい」の記事を紹介して、その人の立場になって考えを巡らせる。 ・「視覚障害のある人かな」 ・「なんで右側なんだろう」 ○NHK「アニパラ」を視聴する。 ○一人ひとりがパラリンピックに関する新聞記事を見つけ、付箋を貼っていく。 ・「オリンピックほどは観てないな」	○パラリンピック開催期間中（前後含む）の新聞（信毎・朝日・朝日こども） ・本時は、関連する記事を集めることに重点を置き、読み込むのは次回以降であることを伝える。
8	・他にもまだ関連する記事はあるかな？ 10/18	○前回の続きで、一人ひとりがパラリンピックに関する新聞記事を見つけ、付箋を貼っていく。そして、興味がありそうな記事を少しずつ読み深めていく。 ・「この人は見たことあるな」 ・「こんなにたくさんの種目があるんだ」 ・「体が不自由なのに、すごいな」	○パラリンピック開催期間中（前後含む）の新聞（信毎・朝日・朝日こども）
9	・パラリンピックについて詳しく調べてみよう！その中で興味を持った選手は誰かな？ 10/21	○パラリンピックの歴史や意義など概要について知る。 「～ピックってつくものはいくつかあるな」 ○パラリンピック選手の中から、気になった選手を一人選ぶ。 ・「なかなか決められない」 ・「自分には知らない世界があるんだな」 ・「色々なことが気になってきたな」	○パラリンピックについての説明資料 ○パラリンピック開催期間中（前後含む）の新聞（信毎・朝日・朝日こども） ○ワークシート ・選んだ理由を明確にさせる。
10-13	・新聞記事からどんなことが見えてくるかな？ ・知りたいことを知るためにはどんな方法があるかな？ 10/22,23	○前回一人ひとりが選んだ選手について、より詳しく具体的に調べていく。 ・「資料が足りないな」 ・「金メダルすごいな」 ・「悔しい気持ちもあっただろうな」	○パラリンピック開催期間中（前後含む）の新聞（信毎・朝日・朝日こども） ○ワークシート
14	・出てきた疑問を整理すると何が見えてくるだろう？ 10/24	○それぞれが調べた結果を発表し、お互いの疑問や関心を明らかにする。 ・「色々と聞きたいことが出てきた」 ・「新聞記者はどうやって取材するときのインタビュー内容など決めているんだろう」	○模造紙
15-16	・自分たちの気持ちを伝える方法としてどんなものがあるだろう？ 10/25	○自分の気持ちを相手に伝える方法について出し合う。 ・「手紙を書くのはどうかな」 ・「オンラインという方法もある」 ・「でも目が見えない人は・・・」	
17	・自分の気持ちを表現してみよう 10/28	○それぞれが選んだパラリンピックの選手に向けて手紙（その他の方法を含む）を書く① ・「なんて書くか迷うな」 ・「手紙を書くのはドキドキするな」	

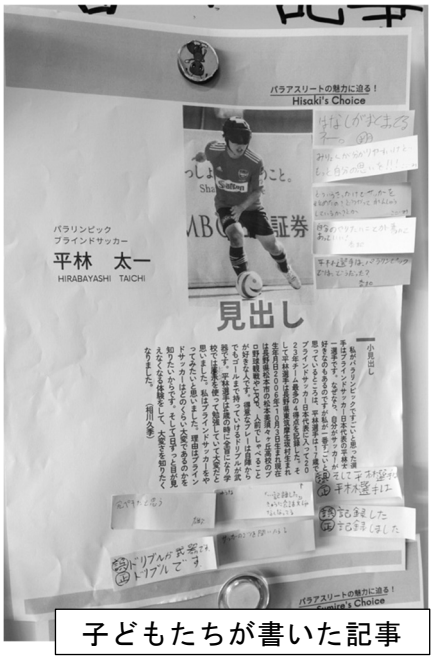
18	・言いたいことはきちんと伝わっているかな？ ・他に改善できることはあるかな？ **10/29※本時**	○それぞれが選んだパラリンピックの選手に向けて手紙（その他の方法を含む）を書く② ・「なかなか言いたいことがまとまらない」 ・「この言い回しで良いか、チェックしてもらおう」	・会場にいる記者さんや先生たちにインタビューする。
19-20	・必要なことは何かな？ 10/30	○手紙を郵送する準備をする。 ・「清書は緊張するな」 ・「手紙を書くなんて初めて（久しぶり）」	○便箋 ○ビデオカメラ ・事前に住所や連絡方法などは担任が確認しておく。
21	・立場を変えると、どんなことが見えてくるだろうか？ 11/1	○障害を持った人たちの暮らしぶりをさらに知るための方法を考える。 「長野駅周辺でバリアフリーの状況について調べてみよう」 「早く手紙の返事が欲しいな」	・相手の立場に立つことがどういうことが想起できるような声がけを積極的に行う。
22-23	・実際に体験してみよう。 11/5	○ブラインドサッカー体験（県の出前講座「パラウェーブ」）を行う。※調整中	・体育館の借用手続き
24-25	11/6	○ブラインドサッカー体験（予備日）	
	11/8	(6 年生　劇団四季鑑賞) →この日に併せて、長野駅の周辺調査を検討	
26-27	・私たちはこれからどうしていけばよいだろう？ 11/11	○これまでの学習をふり返り、自分たちの疑問を整理し、今後の展開を明らかにする。 「そういば、学級憲章で『差別されない』って大事にしていたよね」 「『差別されない』を別の言葉に置き換えてみよう」	○9 月 4 日の朝日新聞「心のバリアフリー　パリで見つけた」
28-29	・私たちにできることは何だろうか？ 11/12	○学級憲章についてふり返る。 ・「ただ口だけ、綺麗事で終わっていたな」 ・「心のバリアフリーって何だろう」 ・「具体的にどんなことができるかな」	・最後は必ず「自分に返す」＝「自分事にする」
30-33	・私たちはセントラルアイデアについて何を理解したか？ 11/13,15	○セントラルアイデアに対する自分の理解を明らかにする。 ○ユニット全体のふり返りシートを記入する。 ○発表する。	・学級憲章を見直してどうなったかを明らかにする。

○小単元名　「本物に出会い、自分の世界を広げよう！」

ア．ねらい(主眼)

今夏のパリパラリンピックで活躍した選手の記事を集め、その中から自分が興味関心を持った選手を一人決め、その選手の「魅力」を紹介する新聞作りを行う。そのために、新聞には日本や世界各地の人々の営み、苦労や葛藤が取材され、リアルな現実が表現されていることを知る。その上で、報道された新聞では知り得ない情報をさらに知るために、実際に交流を持つ（手紙を送る）ことに繋げる。

本時では、自分が興味を持ったパラリンピックの選手について、その魅力を記事に書いた子どもたちが、お互いの記事を見合いアドバイスし合うことを通して、その選手に対する興味関心をさらに高め、手紙を送るためのヒントを得る。



子どもたちが書いた記事

イ．指導上の留意点

・「大切なポイント」は事前に明示しておく。

・単元の最初に使った新聞記事を手元においておく。

ウ．展開

	学習活動	予想される児童の反応	指導・評価	時
導入	1、今日の学習課題を確認する。	「もう一度記事を見直したい」 「手紙を書くんだ」 「まだ終わってない」	・前回までの成果物を持参する。	5
	子どもたちの問い：より良い記事に仕上げるには、さらにどうすべきか？			
展開	2、記事の内容についてアドバイスし合う。	「記事の書き方のコツがあったな」 「視覚障害の方や肢体障害の方など、配慮が必要だったな」 「目が見えない人にはどうやって伝えるのだろう」 「他の人はどんな風に考えたのだろう」 「○○さんの発表は△△が良かったな」 「専門家（信毎の方々）に聞くのも良いな」	・時間が限られているので、ほしいアドバイスを事前に明確にしておく。 ・付箋を使って、相互アドバイスを行う。	25
まとめ	3、アドバイスを共有する。	「良いアドバイスをたくさんもらったから、相手に伝わる文章が書けそうだ」 「自分の言いたいことはだいたい伝わったかな」		15

○児童の反応

公開授業の様子

新聞記事を通して、自分が興味を持ったアスリートと出会った子どもたち。徹底的に調べていく中で、それぞれの記録や生い立ちなどは概ね知ることができたが、現状の情報だけではいまひとつその選手の「魅力」に迫ることは難しいと感じた。そのことが、アスリート本人に直接手紙を書く動機につながった。また、クラスの仲間の文章を目にすることで、自分にはない視点や表現方法の違いに気が付くことができた。公開授業後、子どもたちは手紙を書き上げ直接アスリートに送った。そして、2名の方から返信をいただき、その内容をクラスで共有した際には「本物とつながる」リアルな体感をみんなで喜び合った。その後、子どもたちが選んだアスリートの一人、ブラインドサッカーの平林太一選手とは、縁あって直接お会いする機会に恵まれた。平林選手のお話から、子どもたちはたくさんの衝撃を受けた。その一部は以下の通り（学習発表会の原稿をそのまま掲載）である。

児童 A：そこで本当に衝撃を受けたことがありました。それは、まさに私達のテーマ「当たり前って何！？」と繋がるものでした。私達は、平林選手に「目の前は黒いのか」聞きました。そこでこんな答えがかえってきました。

児童 B：そもそも「黒い」がなにかわからない。

児童 A：色を知らないということです。そんな事、考えたことはありますか？そもそも私達には色が見えることが、「当たり前」でした。平林選手に、「視力が回復する手術があったら手術を受けるか」と聞いたら、あってもやらないと言っていました。

児童 B：これも予想外でした。「漢字などを勉強するのが大変。不便なこともあるけど、生きていける。」とのことでした。

児童 A：これが実際にお会いした時の写真です。考えてみてください、ある日突然目が見えなくなることを。私達は、実際学校の中を目隠しして歩きました。隣で友達がガイドをしていたのに、私は物にぶつかってばかりでした。本当に目が見えなくなったら、慣れてない私には、不便なことだらけになるでしょう。

児童 B：私は想像すらできないかもしれません。

平林太一選手とブラインドサッカーを体験

（６）１年間取り組んだ成果と課題

「地球に生きる一人として自ら問いをもち、課題を我が事として探究していく子どもの育成」という研究テーマの２年次であった。これまで紙媒体としての新聞情報に関心が少なかった子どもたちが、情報の多様さ、確実さなどから情報源としての新聞の価値に気付き、特に探究の授業の中で、新聞を積極的に活用する姿が見られるようになったこと、新聞記事を読み深める過程を通し、「事実」と「意見」を分けてとらえる力が向上したことが１年次の成果であり、その土台が根付いた本年度の NIE 活動であった。

5.6 年クラスでは「当たり前を疑う」というキーワードが子どもたちに浸透しており、探究学習の場面で度々飛び交っていた。そして、その際に新聞記事が極めて有効であることを実感することができた。新聞は自分と社会との接点を感じる窓口である。新聞から「授業で学習していることは、自分の身近な社会で、実際におきているんだ」「自分にもかかわるんだ」「自分と世界はつながっているんだ」ということに気づき、「自分と社会とのかかわり」を感じていくことができる。自分が普段目や耳にしている世界がいかに一元的であり狭いか。そして「当たり前ではない」ということに気づくか。そのメッセージを新聞から受け取り、様々な探究につなげていくことができた。子どもたちはパラアスリートの記事をきっかけに、その後はジェンダーの問題にも関心が広がっていくなど、新聞が持つ「仲介役」としての機能を存分に生かし、学習を深めていくことができている。

しかし一方で、インターネットの利便性は私たちの学びに大きく影響しており、依然として何か疑問が出てきた時に、瞬間的に検索ワードを打ち込み、関連する情報の中から必要な項目を選び取るといった行動に出やすい。この行為自体に制限をかけることは難しいが、果たして本当にそうだと言えるのか、他の意見はないのか、そもそも誰がそう言っているのかという NIE から学んだ情報モラルの大切さを今後も子どもたちと学び続けていきたい。そして、情報獲得の選択肢を広げ、より批判的且つ多面的に事象を読み解くスキルの獲得を目指したい。